HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オホーツク文化の形成過程 ： 「十和田式」をさかのぼる
Author(s)	小野, 裕子; 天野, 哲也
Citation	サハリンにおけるオホーツク文化の形成と変容・消滅 ： 日ロ共同シンポジウム, 5, 115-118
Issue Date	2002-02-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73777
Type	conference paper
File Information	115-118.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

オホーツク文化の形成過程－「十和田式」をさかのぼる－

天野哲也・小野裕子（北海道大学）

はじめに

われわれは3年間の科研の計画で二つの方針をたてた。1 北海道での既知のデータにつなげてゆく。2 サハリンでは、「まとまり」 association の明示された資料、定量的データをそなえた資料がなおじゅうぶんには公開されていないので、主に分布論的に取り組む。実際には、クズネツーヴォⅠ遺跡（サハリン大学/未報告）を集中的に検討し、さらに西海岸の資料（同、サハリン州郷土博物館）を検討した。

1. クズネツォーヴォ遺跡資料の概要

サハリン南西端ちかくで続縄文文化・「鈴谷文化」・オホーツク文化期にいとなまれた集落址であり、主にその土器資料数百個体を観察した。「鈴谷式」土器関係では縄目文が主であり、櫛歯文例はきわめてわずかである。櫛歯文をもつ土器（恵須取式）のグループは入りこんでいないであろう。オホーツク式土器では、「十和田式」がかなりみられ、しかもモネロン島や香深井遺跡群のものなどと酷似している。「江ノ浦式」土器はきわめて多い。これをもつグループはこの地域になだれ込んだのであろう。

2. 十和田式土器の口縁部文様（図1）

礼文島香深井A遺跡さらに香深井遺跡群における調査の成果から、オホーツク文化前期において、刺突文系文様をもつ土器「十和田式」は時間的にさかのぼるほど刺突文 hole にたいする突瘤文 bulge の比率が高まることが指摘できる（天野 1998）。香深井A遺跡魚骨層ⅤとⅥの間でこれは画期的に変化する。そこでいま仮にここを境にして、それより前の段階Ⅰ－突瘤文段階と、後の段階Ⅱ－刺突文段階にわける。Ⅰ段階の最も初期の土

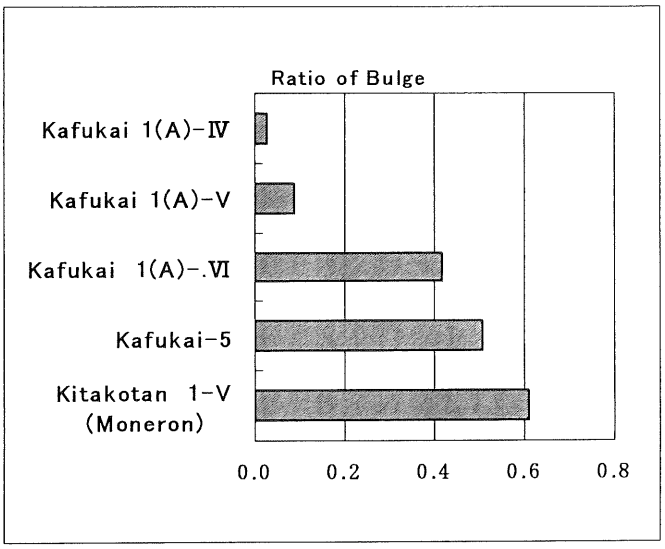


Fig.1 Ornaments of "Towada type"pottery － Mouth

器群はおそらくほとんど口縁部文様に突瘤文をもつもので成っていたのではないか。

クズネツォーヴォ遺跡の「十和田式」土器には、突瘤文をもつものと刺突文をもつもの両方があるが、両者の変遷・関係は未詳である。

3. 胴部文様（図 2）

では土器胴部文様はⅠ－Ⅱの間でどのように変化するか？ みられるとおり、刻文 cut 隆帯文 band の文様要素が増加し、替わって沈線文 line と無文 O が減少する傾向がある。ここで興味深い点は櫛歯文 comb　stamp の動向である。一見、時間的にさかのぼるとこれが増加しそうであるが、復原資料がかなり多い香深井 5 遺跡でこれが顕著でない。したがってすくなくとも北海道では、「十和田式」土器の胴部文様に櫛歯文が普及するのはⅡ段階になってからだと言えそうである。

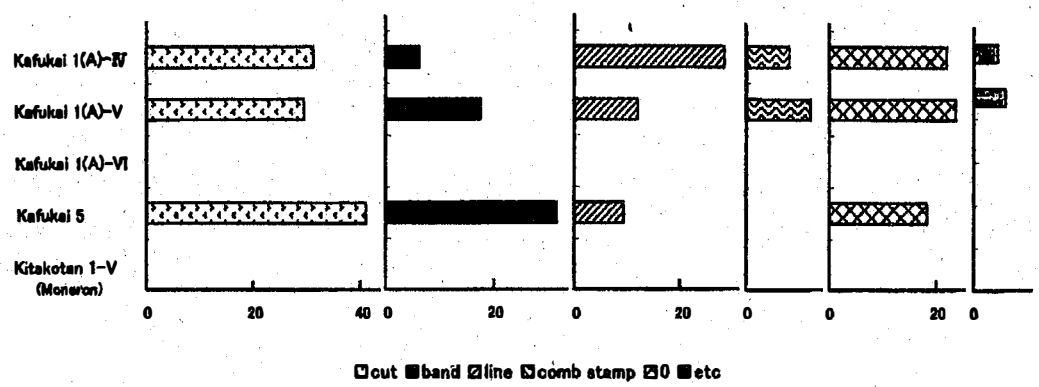


Fig.2 Ornaments of "Towada type" pottery—body

以上のことから想定されるⅠ段階の最も初期の土器群は、口縁部に突瘤文、胴部に刻文や隆帯文をもち、底部は尖底・丸底例をふくむ概して径の小さいもので成るものであろう。

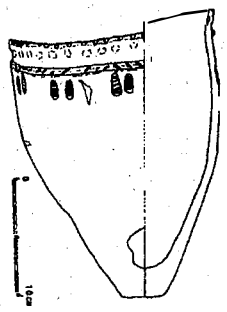
クズネツォーヴォでは、口縁部突瘤文と胴部櫛歯文の組合せ例は確認できなかった。しかしカリーニナ 2 およびサハリン州郷土博物館蔵の「木村コレクション」(No.2284/451,1933 年 4 月 23 日、出土地未詳:良音間？）にはこの例があるので、サハリンではⅠの段階に櫛歯文が胴部文様に採用されていることがわかる（Core Area でも北部ほど濃密か？）。



Kalinino-2（S.Gorbunov & Amano)



S.Kimura's collection
(Sakhalin State Regional Museum)



Kafukai-5（M.Uchiyama　etc.2000)

4. 分布状態（図 3）

オホーツク文化の分布範囲は、Ⅰ突瘤文段階ではサハリン南西端（カリーニナースヤ以南）から北海道北端（礼文・利尻－枝幸以北）に限られる（Core Area）。Ⅱ刺突文段階には分布範囲は南北にやや広がり（北はサドーヴニキ?、南は天塩まで）、しかもその行動範囲が飛躍的に拡大（北はベーリンスコエ、南は奥尻青苗砂丘、東は根室弁天島まで）。それぞれの分布域はどのような意味をもつか。これらと接していた集団はなにか？北海道では続縄文（後北）集団である。サハリンではⅠ段階では櫛歯文土器をもつグループかこれの影響をうけた「ススヤ文化」の残存グループ、Ⅱ段階ではこれらを飲み込んだ刻文系土器（原「江ノ浦式」）をもつ集団であろう。

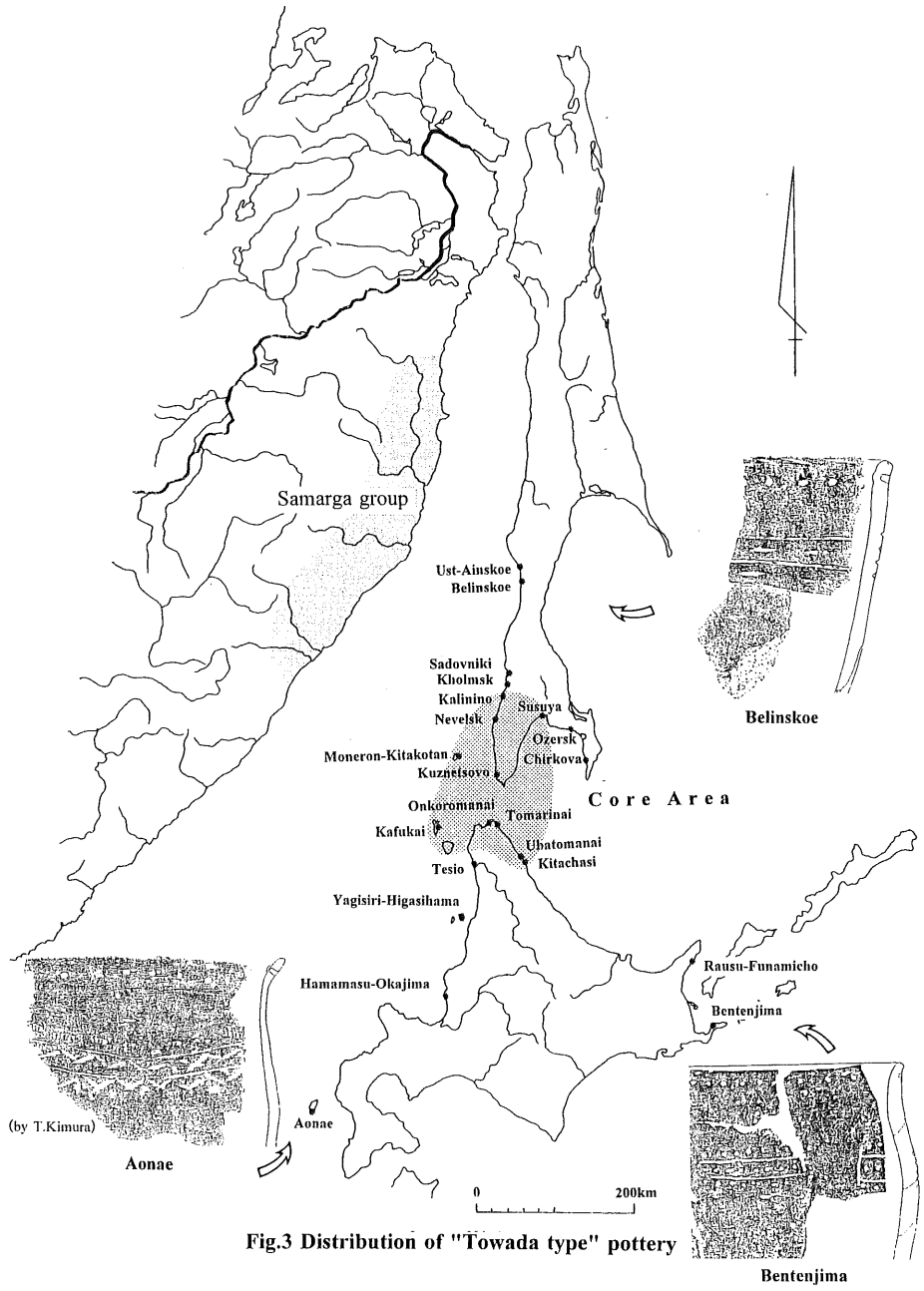


Fig.3 Distribution of "Towada type" pottery

住居（図4）

オホーツク文化の竪穴住居の特徴は 1:一般に大形（床面積 30 ㎡以上、平均 70 ㎡余、複数の核家族による共同生活）、2:中央の炉を囲む形に土間、その外側に居住部分を設け、両者を溝で区画する。次第に土間部分のみに粘土を貼るようになる。3.プランは、前期は長方形、中期以降に六角形となる（香深井 A 遺跡では魚骨層Ⅲ後の 1 号 b 竪穴住居以降）。

これらの特徴の多くはは「ススヤ文化」には直接つながらない（香深井 B 遺跡、オンコロマナイ H-1･2･3 竪穴住居、アジョールスク 5 号、スタラドゥプスコエ 2-2 号など）。ただしオンコロマナイ H-3 竪穴住居には周溝があり、壁から 1.5m くらいの範囲に砂質粘土を貼って一段高い床を作っている。これは上記オホーツク文化の住居構造に共通するものかもしれないし、その標高も低い。「ススヤ文化」にこのような影響をあたえたものはにか。

6. 「ススヤ文化」とオホーツク文化の関係

オンコロマナイ遺跡 H-3 の土器の特徴、すなわち尖底、胴部に縄文をもたない例、胴部に刻文（刻線文）・貼り付け文をもつ例は「鈴谷式」の最後の姿であろう。「鈴谷式」土器に影響を与えて、このように変化させたものとして想定できるものは、尖底/平底で口縁部に突瘤文、胴部に刻文/刻線文・隆帯/貼り付け文をもつ土器である。これすなわちⅠ段階のグループであり、これが道北オホーツク集団の主流になったのではないか。

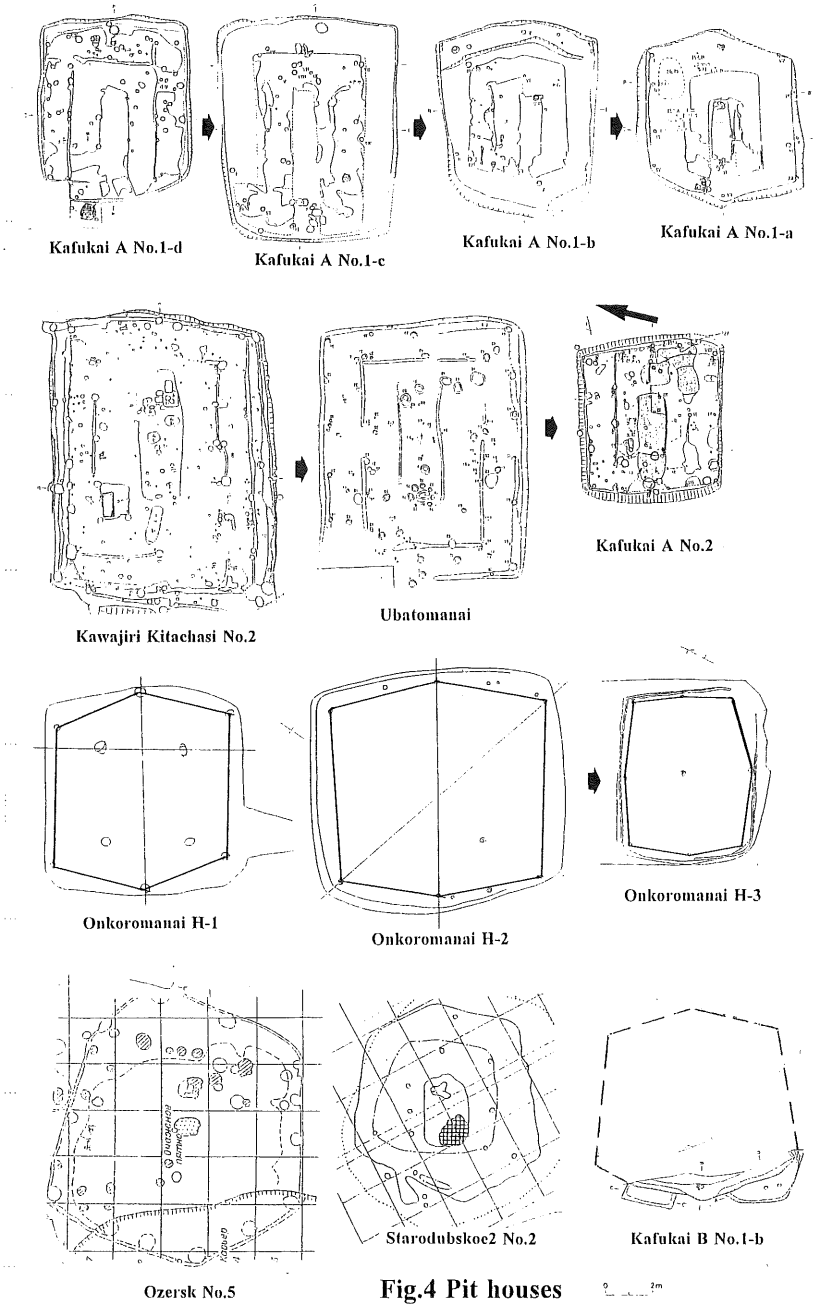


Fig.4 Pit houses